

「見方・考え方」を活用した 授業実践

現行学習指導要領の教科書を使って

新学習指導要領
に向けて

「見方・考え方」を活用した授業実践 ～現行学習指導要領の教科書を使って～

【総論】

「見方・考え方」を働かせる社会科授業づくりを支援する	2
----------------------------	---

【地理的分野】

◆ 1 単位時間での「見方・考え方」を活用した実践事例	
第1編 第3章 世界の諸地域 5節 南アメリカ州	6
◆ 単元のまとめでの「見方・考え方」を活用した実践事例	
第2編 第3章 日本の諸地域 2節 中国・四国地方	8
◆ ワークシート	10

【歴史的分野】

◆ 1 単位時間での「見方・考え方」を活用した実践事例	
第3章 中世の日本 2節 東アジア世界との関わりと社会の変動	12
◆ 単元のまとめでの「見方・考え方」を活用した実践事例	
第3章 中世の日本	14
◆ ワークシート	16

【公民的分野】

◆ 1 単位時間での「見方・考え方」を活用した実践事例	
第5章 地球社会と私たち 2節 さまざまな国際問題	18
◆ 単元のまとめでの「見方・考え方」を活用した実践事例	
第5章 地球社会と私たち	20
◆ ワークシート	22

【付録】

◆ 新学習指導要領における「見方・考え方」一覧	24
-------------------------	----

「見方・考え方」を働かせる社会科授業づくりを支援する

(1) 今なぜ「見方・考え方」か

「見方・考え方」の指導が注目されている。このたびの学習指導要領改訂で特に「見方・考え方」に注目すべき理由を、筆者は大きく以下の3点で理解している。

第1に、「見方・考え方」は、子どもに習得させるべき知識ではなく、学びの過程で働かせる「視点や方法」として位置付けられたこと。目的概念から手段概念への大きな衣替えである。

第2に、「見方・考え方」を働かせる目的は、課題解決的な学びを行うためにあるとされたこと。具体的には、社会的事象を考察したり構想したりする活動の手段として規定された。

第3に、これらの論理的な帰結として、子どもが「見方・考え方」を働かせているか否かは(思考・判断・表現)、知識の再生ではなく、単元等の学習のまとまりにおける考察や構想の「過程」や「成果」で評価せざるを得なくなった。

これらの三つのポイントは、授業づくりはもちろん、それを支援する教科書の紙面構成にも影響を及ぼすと予想される。

そこで本稿では、「見方・考え方」の働きを意図的に組み込んで実践した授業を紹介したい。本授業を素材に、①「見方・考え方」の働きを可視化するとともに、②課題解決と社会認識の深まりと評価を支援する方策を提案したい。

(2) 江戸時代の朝顔ブーム

筆者らは、上述の①②を研究課題として、2017年6月8日～9日、ある中学校の1年生を対象に、単元「歴史を初めて学ぶ3時間ーブームの条件を考えるー」を実践した。中学校1年生の生徒からすると、小学校に入学して初めて

本格的に栽培した草花であり、夏の風物詩でありながら日常生活に埋もれがちな「朝顔」。その朝顔がなぜ江戸の庶民をとりこにし、高い値で取引引きされたのか、その理由を多面的・多角的に探究させることで、ブームの成立条件と歴史の捉え方を指導しようとした。

本研究授業において、課題解決と目標達成の方法論として着目したのが、いわゆる思考ツールである。社会科の目標に基づいて思考ツールを選択し、配列し、子どもに表現させたならば、
①「見方・考え方」の働きを可視化できるし、
②課題解決と社会認識の深まりと評価を支援できる、このような研究仮説を設定した。

①考察に向けた課題作り

第1時は、諸事象の**推移**や**変化**に着目して、追究に値する事象を見だし、学習課題を設定する単元の導入部である。課題設定に際しては、現代や「私」との関わりにも意識させることに留意した。これらのねらいを受けて導入したのが、ウェビング図(図1)とステップチャート(図2)の二つの思考ツールである。第1時は、次の指示・発問を軸に展開した。

- Q1: 私たちにとって朝顔ってどんな存在ですか。思いつくままに言葉を書き出し、イメージを広げよう。
- Q2: 昔と今では、朝顔の存在はどのように変わりましたか。図から読み取ろう。
- MQ: なぜ江戸時代に朝顔がブームになったのだろう。**

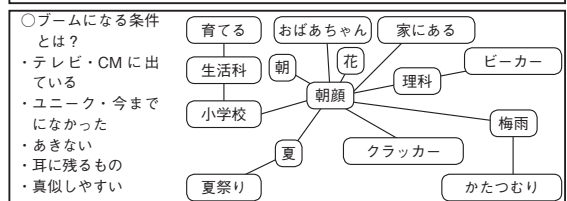


図1 ウェビング図による指導

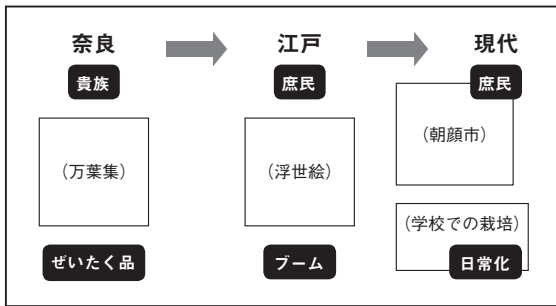


図2 ステップチャートによる指導

Q1では朝顔を起点にした連想ゲームを行い、ウェビング図を作成した。生活科、夏、朝、家にある…と子どもから見た意味世界が広がっていくが、そこに非日常的な香りは感じられない。

そこで図2の中央に配した江戸時代の浮世絵を拡大して提示する。紅と紫の大輪の朝顔が売られている市で、着飾った女性3名が花を愛でている光景を描いた浮世絵である。今とは明らかに異なる朝顔の社会的存在に気付かせる。ここでQ2に移って、万葉集に現れる贅沢品としての朝顔→江戸時代に庶民を魅惑した朝顔→現代の日常に密着した朝顔、これらを時系列に並べたステップチャートを提示する。この過程で朝顔の意味の変化と江戸時代の特殊性を際立たせることに成功した。最終的にMQは子どもの間で探究に値する課題として認知された。

②課題解決を通した考察

第2時は、**事象相互の関連**を視点にして理由を考察し、課題を解決していく展開部である。このねらいを受けて、クラゲチャートを朝顔のプランター（クラゲの頭）と3本の柱（クラゲの足）に置き換えた思考ツール（図3）を開発し、試用した。学習課題は「なぜ江戸時代に朝顔ブームが起こったのか？」であり、次の指示・発問に沿って展開された。

Q3：資料から読み取れることを、3本の柱＝クラゲの足に書き出そう。

Q4：資料から推察される朝顔ブームの理由を、プランター＝クラゲの頭に説明しよう。

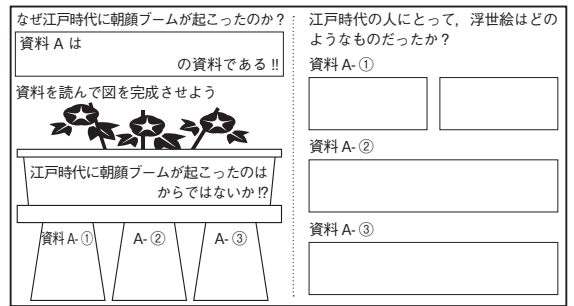


図3 変形クラゲチャートによる指導

Q3とQ4は、ジグソー法のエキスパート班に分かれて展開した。教師は、視点を異にする4種類の資料、すなわち【資料A】品種改良された美しい朝顔の鉢物を愛でる庶民の姿、【資料B】花や植木を売買する商人や市の登場、【資料C】流行のものを役者や美人とセットで描いた浮世絵の広まり、【資料D】銭の流通・貯蓄の増加と庶民の経済的なゆとり、という内容それぞれを象徴的に記述している資料を配布した。図3に示すように、資料の右には3枚の図版・データが貼付されている。子どもは、自分が担当する図版・データから読み取ることのできる事実・情報を3本の「柱」に、また柱の内容から推論されるブームの理由を、柱の上の「プランター」に書き込んでいった。

③課題解決を踏まえた省察

第3時は、**相互の関連**を視点にして理由を多面的・多角的に考察し、課題解決に決着をつける終結部である。加えて、自己の歴史の捉え方をメタ認知させる機会を与えることも意図した。このねらいを受けて新たに開発したのが、構造を説明するストラクチャーチャートと、序列を評価するダイヤモンドランキングを合体させた思考ツールである（図4）。第3時は、次の指示・発問に沿って展開した。

Q5：4枚の資料から分かったことを、互いに報告し合おう。

Q6：4枚の資料から、クラゲの頭＝プランターを切り取ろう。

Q7：切り取ったクラゲの頭＝プランターをシートに貼り付けよう。理由の重要度に応じて上下の位置を決めるとともに、矢印と吹き出しで相互の関係を説明しよう。

Q8：シートを眺めて、「朝顔だからブームになった」か「江戸時代だからブームになった」の、いずれかの結論を出そう。

Q9：成果を発表しよう。関係図の作り方と結論の導き方は、班でどのような違いが見られるか。なぜ違いが生じるのか。

Q5 から Q7 にかけて、子どもはジグソー班に戻って朝顔ブームの四つの理由を報告した。具体的には、A：品種改良と園芸文化の広まり、B：園芸商品を扱う市場の成立、C：広告・情報メディアの発達、D：貨幣経済の広まりと貯蓄の増加である。エキスパートの報告を受けて、4枚の理由（プランター）を切り取り、位置取りとつながりを見定めてシートに貼り付ける過程では、「ああでもない」「こうでもない」との議論が繰り返された。

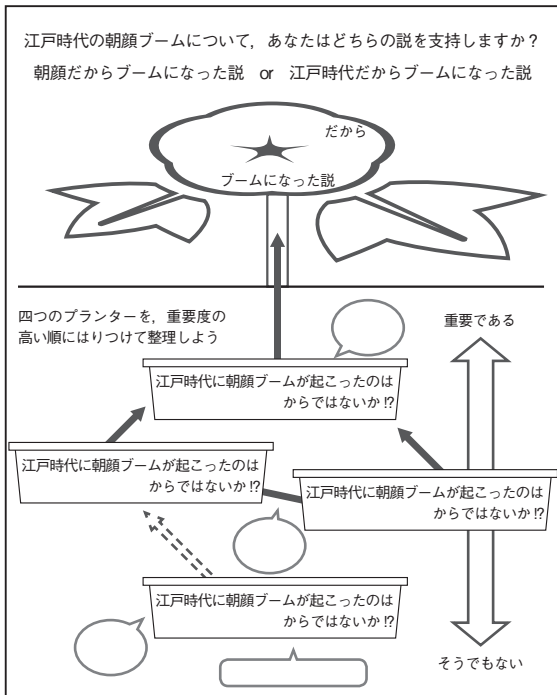


図4 変形ストラクチャーチャートの例

実際のところ、この図に一つの正解はない。

評価のポイントは、理由相互の整合性であり、最終的に導かれる結論の合理性である。例えば、理由Aや理由Bを図の上位に位置付けたい班は、Q8で「朝顔だからこそブームになった」説を採用するのが合理的だろうが、逆に「江戸時代だからこそブームになった」説を採用した班は、理由Cや理由Dを上位に位置付けた上で全体の配置を再構成していく必要があるだろう。なお、Q8で判断に悩んで、両説の優劣度を比率で表現した班も見られた。

最後に班で仕上げたシートを眺めながら個人でMQの答えと歴史の捉え方を自由記述させた。その結果、9割以上の生徒がMQに回答でき、6割の生徒が構造的な理由を説明できていた。さらに1割程度の子どもが、歴史（ブームの理由）の捉え方には、人の好みとその選択（人為性）を強調するか、社会のしくみとその変化（構造的）を強調するかで違いが出てくることをメタ認知できていた。

(3) 「見方・考え方」の働きを可視化する意味

本稿を閉じるに当たって、本授業が示唆する①「見方・考え方」の働きを可視化し、②課題解決と社会認識の深まりと評価を支援する手立てをまとめておきたい。

第1に、学習の目的と段階に応じて適切な思考ツールを活用することである。先に紹介した実践の場合、単元全体では（人々が翻弄されがちな）ブーム成立の理由を考察するという目的のもとにMQが設定され、MQの追究に有益な「見方・考え方」とそれを働かせる思考ツールが優先的に選ばれ、配列されていた（図5）。

導入部では、現代社会における事象の意味を省察するウェビング図と、意味の時代間の変化を捉えるステップチャートで、江戸時代後期の

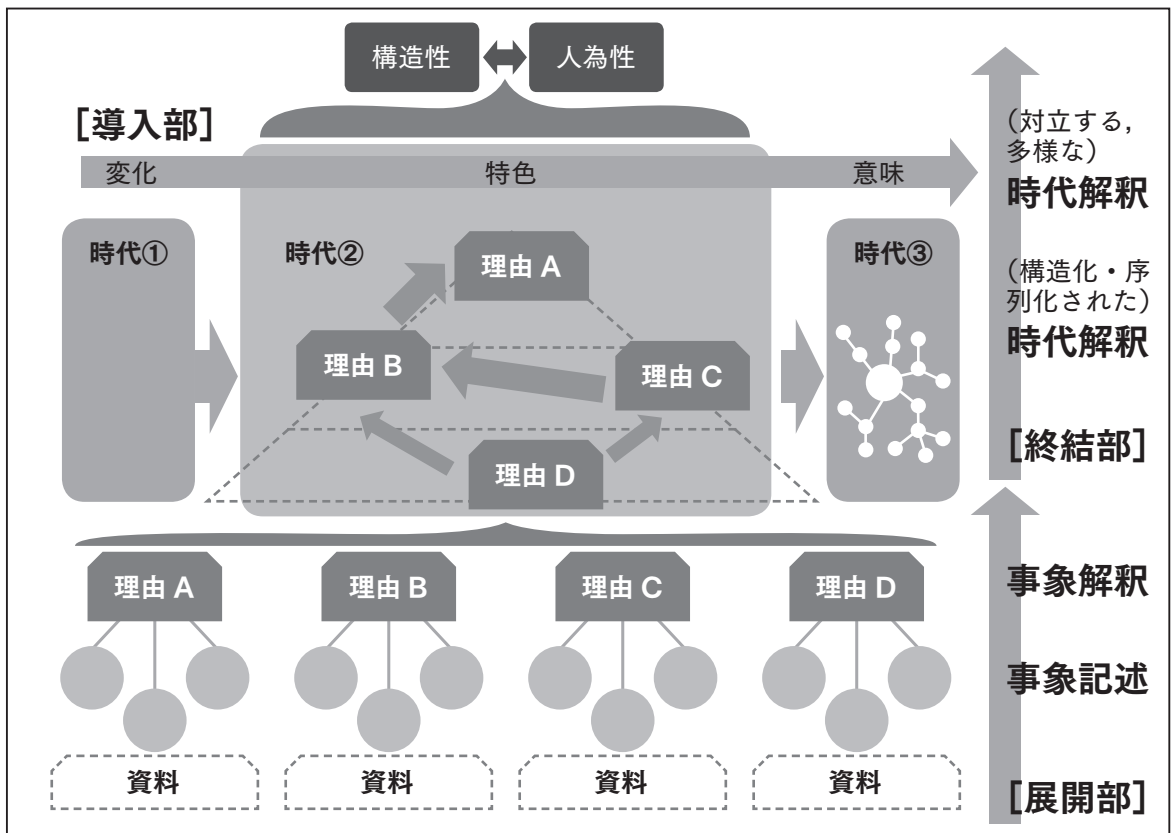


図5 子どもの歴史認識の深まりの過程と知識の構造

文化的な特色を浮き彫りにさせる。展開部から終結部にかけては、そのような特色が生まれた理由を、資料から読み取ることのできる事象記述とそれら进行分析して得られる事象解釈を、**クラゲチャート**を用いて説明させる。さらに、上述の過程で導かれた複数の事象解釈を一定の歴史観に基づいて関連付けて得られる（構造化・序列化された）時代解釈を、**ストラクチャーチャート**と**ダイヤモンドランキング**の理念を踏まえて表現させていた。このような学習過程が、単元というまとまりを単位とした課題解決的な学習と、教科指導ならではの歴史認識の深まりを保証するものとなっている。

第2に、思考ツールを活用して子どもに表現の機会を与えることである。子どもは思考ツールを適切に使いこなすことで、社会認識の確実な深まりと個性的な作品づくりの枠組みが得られるし、並行して、学びの「過程」と「成果」

をメタ認知する場も得られる。教師もこれらの作品を媒介にして、子どものつまずきと成長を評価することができるだろう。

すなわち、思考ツールを用いた表現活動は、知識の構造図の作成主体を、教師から子どもへ移行させる可能性を秘めている。到達目標は維持したままに、しかし到達のカタチは固定することなく柔軟に構築させ、それを相互に批評・吟味させるところに、発想の転回がある。

第3に、「見方・考え方」を働かせる支援策を、積極的に活用していくことである。本書では、単元を見通した「見方・考え方」の活用法と、1時間の指導における「見方・考え方」の活用法を紹介している。これらの指導案や先の実践から効果の見込まれる思考ツールを掘り起こし、日々の授業実践に組み込んでいくことも考えられるのではないだろうか。

1 単位時間での「見方・考え方」を活用した実践事例

(1) 基本的な考え方

従来、社会科は内容教科であるという理由から、教室は教師による知識の伝達の間となる比重が高かった。一方、グローバル化、情報化、少子高齢化といった社会構造の変化等を踏まえ、学校教育も大胆に転換する必要があると認識されつつも、結局は「地域的特色を理解させる（地理的分野）」ため、知識の習得に時間が割かれてきた。しかしながら、今後は、具体的な追究の視点を踏まえた学習活動を通して、特に思考力、判断力、表現力等を「身に付けることができるよう指導する」こと、すなわち、具体的な生徒の学びに比重を置いた授業実践をデザインすることが、教師にとっての専門性と捉えることが必要である。

そこで、新学習指導要領の地理の目標に示された五つの「見方・考え方」のうち、本稿では主に「地域」に着目した授業展開を検討した。

(2) 授業展開例

①導入

赤道とアマゾン川の位置を白地図で確認後、南アメリカ大陸が「赤道直下の大陸である」という地域性を題材とし、既に学習しているアフリカ州との一般的共通性を見いだす問い（例えば、「アマゾン川流域は、どのような地域的な特色があるのか?」）を導入とする。

予想される生徒の回答例

- ・気候的特色に関する回答
- 熱帯雨林気候、高温多湿 など

・自然的特色に関する回答

- ジャングル、マングローブ、多様な動植物、大陸に大河がある など

②展開1

次に、導入で得た生徒の回答（熱帯雨林気候やジャングルなど）を引用し、デジタル教科書等で写真資料（教科書 p.73 **5**）を拡大提示し、アマゾン川流域の様子を生徒に想像させる。その後、教科書 p.100 **1** を提示し、熱帯雨林で地面が露出している原因を地域開発の視点から連想させ、**2** との比較から、「どのような地域で開発が進んでいるのか」という問いを展開1とする。

期待する生徒の回答例

- ・内陸部・人口密度の高い発展途上国
- ・人口が少ない地域・自然が多い地域

③展開2

続いて、「南アメリカ州以外の赤道直下の地域でも開発が進んでいるだろう」との仮説を次の課題の起点とし、教科書 p.101 **5** の資料から読み取ったことを整理する。

期待する生徒の回答例

- ・赤道直下では森林減少率が高い
- ・発展途上国では森林減少率が高い
- ・先進国では森林減少率は低い
- ・ブラジルの森林減少量が多い など

また、地球規模の課題（森林が減少しているという課題）には地域性が見られることに着目し、中でも、南アメリカ州で進行している開発は熱帯雨林の減少とどのような相関関係にあるのかについて、メリット、デメリットとして整理する学習活動を展開2とする。

④まとめ

最後に、「環境を保護しながら地域開発を進

第1編 第3章 世界の諸地域 5節 南アメリカ州

3 開発の進行とその影響

教科書：p.100～101

める具体的な提案をする」ことで、持続可能な社会づくりを検討させる。なお、主体的で対話的な学習を促すためには、自己の考察を他者との交流によって深化させることを意図した協働的な学習が効果的である。

本時のねらい：「どのように開発を進めてきたのか（表層の学習テーマ）」について学習したプロセスを活用し、「環境を保護しながら地域開発を進める具体的な提案をする（深層の学習テーマ）」ことを目指す。

学習内容（配当時間）	学習活動	指導上の留意点
導入 アマゾン川流域の地域 の特色を見いだす。 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 白地図に赤道（赤色）、アマゾン川（青色）、アンデス山脈（茶色）の位置を記入する。… (1) ①～③ 【<u>追究の視点を生かした問いの例</u>】「アマゾン川流域は、どのような地域的な特色があるのか」という問いを立て、<u>アフリカ州と比較して考察したことをワークシートに記入する。</u>… (1) ④ 	<ul style="list-style-type: none"> 赤道直下の雄大な自然をイメージさせるため、アマゾン川について、西に位置するアンデス山脈から大陸が広がる東に向かって流れていることに着目させる。 アフリカ州の学習で得た既存知識を活用し、「赤道直下の大陸である」という地域性に着目させ、その気候的特色から自然的特色（例えば熱帯雨林や大河の存在）に気付かせる。 導入で得た熱帯雨林に関する生徒の回答を引用し、展開1につなげる。
展開1 南アメリカ州の開発が進み、熱帯雨林が減少していることを理解する。 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> アマゾン川流域の様子を想像する。 教科書 p.100 1 と 2 から、熱帯雨林で地面が露出している原因を探る。… (2) ① 【<u>追究の視点を生かした問いの例</u>】「どのような地域で開発が進んでいるのか」という問いを立て、<u>環境条件や人間の営みと関連付けて考察したことをワークシートに記入する。</u>… (2) ② 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書 p.100 1 の資料を提示し、例えば「15年後はどのように変化しているか」と発問してから 2 を提示すると、生徒は地域開発の進行を実感できる。 協働学習で互いの思考を共有できるようにワークシートを工夫する。その後、生徒の回答を引用し、「<u>南アメリカ州以外の赤道直下の地域でも開発が進んでいるだろう</u>」という仮説を立て、展開2につなげる。
展開2 資料を基に、地域開発について考察する。 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 教科書 p.101 5 から分かることをワークシートで整理する。… (3) ① 【<u>追究の視点を生かした問いの例</u>】「森林減少率が高い（または低い）のはどのような地域か」という問いを立て、<u>地理的な見方から考察したことをワークシートに記入する。</u>… (3) ②③ 地域開発は熱帯雨林の減少とどのような相関関係にあるのかについて、メリットとデメリットを整理する。… (4) 	<ul style="list-style-type: none"> 資料を読み取る際は、生徒が多様な視点から考えられるよう、発問を工夫する。 地理的な見方には、例えば、過疎・過密、先進・発展途上、赤道・極、といった視点があり、こうした視点で考えるようアドバイスする。 地域開発に伴う熱帯雨林の減少について、地球的規模の課題として捉えさせる。また、一般的共通性と地方的特殊性を区別して考察させると、単元のとめ学習の際の情報整理に有効になる。
まとめ 持続可能な社会づくりを検討する。 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> 【<u>追究の視点を生かした問いの例</u>】「<u>環境を保護しながら地域開発を進める具体的な提案をしよう</u>」という問いを立て、考察したことをワークシートに記入する。… (5) 	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州における提案にとどまらず、地球的規模の課題を持続可能な社会づくりの視点から考察したことを、学習者間で共有できる協働的な学習（小グループ内での相互発表など）を設定する。

※表中の波線部分は「地域」に関わる視点を踏まえた追究の方法を示す。

※表中 (1)～(5) はワークシートの記入欄に対応している。

単元のまとめでの「見方・考え方」を活用した実践事例

(1) 導入

教科書 p.201 上段にある「中国・四国地方の地名を確認しよう」を活用し、基本的事項の振り返りを行う。

(2) 展開（問いを立て、まとめる）

まず、単元のまとめでは、それまでの学習内容を踏まえ、単元全体を貫く追究テーマ（教科書では、「中国・四国地方の都市や農村で見られる問題や変化はなぜ生じているのか」が該当する）の解決に迫る問いを、生徒に個々（またはグループ）に設定させる（あるいは指導者が問いを提示する）ことから始める。

これは、例えば、「本州四国連絡橋が建設され、山陰と瀬戸内、南四国と瀬戸内も高速道路で結ばれた（教科書 p.200 本文参照：「空間的相互依存作用」の視点）」ことに着目した生徒は、「中国・四国地方では、連絡橋の建設や高速道路網の整備により、都市や農村の人口移動がどのように変化したのか」という問いを解決することによって、また、「山間部の過疎地域と瀬戸内の都市（過密地域）をインターネットでつなぎ、未来を創る（教科書 p.199 6 参照：「地域」の視点）」ことに着目した生徒は、「高速通信網の整備、発達によって、都市や農村の産業がどのように変化するのか」という問いを解決することによって、追究テーマの背景を考察する授業構想である。さらには、「交通渋滞の問題を解消するために都市を再開発した（教科書 p.197 本文参照：「地域」の視点）」ことに着目した生

徒は、身近な地域と関連付けて考察することにより、「都市や農村の暮らしや環境がどのように変化するのか」といった、多様な問いを立てることで、追究テーマを多面的・多角的に考察することになる。つまり、単元のまとめでは、これらの問いを追究することで単元全体を貫く追究テーマの解決に迫る、という学習プロセスを表現させることが地域的特色を多面的・多角的に考察し、構想（選択・判断）することになる。

次に指導者は、生徒にどのようなまとめ方が有効であるかを検討することが求められる。それまでの授業を振り返り、情報を整理する場合は、追究のための問いやグラフ、地図等の資料をあらかじめ提示したり、生徒が情報をまとめる枠をワークシートに示したりするなどの工夫をしておく、どの学習者も一定の思考の枠組みで単元をまとめることができるようになる。

一方、生徒の個々（またはグループ）の追究過程をウェビング図で作成させると、多様な思考の表現が想定され、構造的にまとめることが可能となる（教科書 p.201 参照）。具体的には、各自が設定した「単元全体を貫く追究テーマの解決に迫る問い」の着眼点（先述の波線部分）に関わる解をワークシートの中央に書き出し、関連する語句や、授業で考察してきた情報をマインドマップとして表現することで、追究テーマの解決を図る学習プロセスが表出されたワークシートが完成していくのである。

また、この単元では、中国・四国地方の「都市や農村で見られる問題や変化」の背景を追究するだけでなく、過去、現在、未来の変容を見通す力を養うためにも、生徒が生活する地域において、中国・四国地方で見られる都市と農村の問題や変化の一般的共通性を見いだすことで

地域の課題を再点検し、それを解決するための提案を行う授業展開につなげることもできる。

なお、ウェビング図の作成に当たっては、1学年時より計画的な指導を継続することで生徒の技能が高まり、より深い学びが展開されることが期待できる。

(3) まとめ（発表し合う）

3～4人のグループを作り、互いに発表し合う時間を設定する。その際、追究テーマの解決に迫る問いの視点が異なる生徒間でグループを構成すると、多様な見方・考え方を知る機会が増え、その結果、主体的に追究テーマを解決しようとする態度を養うことができる。さらに、単元を貫く追究テーマの解決について発表し合う際には、「身近な地域の事象」と関連付けて互いの発表を傾聴し合うよう指導する。その価値は、例えば、「中国・四国地方で明石海峡大

橋が開通し交通網が整備された結果、大都市に人口が吸い寄せられる『ストロー現象』が課題となっている（教科書 p.200 本文参照）」ことに着目した都市部に住む生徒が、「地下鉄が私鉄各線と乗り入れたことによる変化」という「身近な地域の事象」と関連付けて新たな問いを立てたとして、「乗換駅の乗降客数の減少に伴い小売店の消費が落ち込む」という仮説の下で「交通網の整備に伴う消費の落ち込みへの課題」という一般的共通性を見いだす（または、その地域特有の課題、つまり地方的特殊性を発見することもあり得る）、という一連の学習プロセスによって、社会的事象を多面的・多角的に考察し表現する学習の機会が保障されることにある。

また、「身近な地域の事象と関連付けて新たな問いを立てる」という手法は、持続可能な社会づくりを踏まえた「見方・考え方」を育むことにも有効である。

学習内容（配当時間）	学習活動	指導上の留意点
導入 基本情報を確認する。 (5分)	・中国・四国地方の地名等を確認する。	・教科書 p.201 上段を活用する。
展開1 単元を貫く追究テーマの解決を構造的に表現する。 (30分)	・着目した視点を踏まえ、追究テーマの解決に迫る問いを設定する。…① ・①の解をワークシートの中央に書き出してからウェビング図を作成する。…② ・②を基に単元を貫く追究テーマの背景を記述する。…③	・まず、教科書の記述やノート等から授業を振り返りながら、着目する視点を考えさせる。次に、追究テーマの解決に迫る問いを設定させる。 ・習熟度に応じて、指導者が問いをいくつか例示することも検討する（この後、四人1グループで相互発表させようとする場合は四つの問いを用意し、分担させる）。 ・ウェビング図は①の解をワークシートの中央に書き出してから始めさせる。
まとめ 考察した内容を発表し合う。 (15分)	・3～4人のグループになり、発表し合う。 ・身近な地域の事象と関わりある社会的事象を見いだす。…④	・①→②→③の順で発表させる。その際、「身近な地域の出来事」と関連付けながら聞くように伝えておく。

※①～④はワークシートの記入欄に対応している。

第1編 第3章 世界の諸地域

5節 南アメリカ州 3 開発の進行とその影響

教科書：p.100～101

(1) 次の位置を下の地図に記入しよう。

- ①赤道 ②アマゾン川 ③アンデス山脈



④赤道直下のアマゾン川流域は、どのような地域的な特色があるのだろうか？
気候や自然の面から考えてみよう。

(2) 写真を見て考えよう。

①地面の色が露出している原因は何だろうか？

②①のような開発は、どのような地域で進んでいるだろうか？

(私の考え)

(班員の考え)

(3) 資料から読み取ろう。

①赤道付近では森林が(減少・増加)し、中でも()州やオセアニア州では、その割合が高い傾向にある、

ということが分かる。

また、森林減少率が

②高い地域は、

③低い地域は、

ということが読み取れる。

(4) 開発が進むことのメリットとデメリットを整理しよう。

(メリット)

(デメリット)

(5) 持続可能な社会づくりを進めるためにどのような提案ができるだろうか？
開発と環境保護の視点から、考えたことを具体的に記入しよう。

第2編 第3章 日本の諸地域
2節 中国・四国地方

教科書：p.191～202

単元のまとめ

追究テーマ 中国・四国地方の都市や農村で見られる問題や変化はなぜ生じているのでしょうか。

【着目した視点】

【①…追究テーマを解決する問い】

②

【①の解】

【③…追究テーマの背景】「都市や農村で見られる問題や変化」の背景にあるもの

【④…身近な地域の事象との関わり】

1 単位時間での「見方・考え方」を活用した実践事例

(1) 歴史的な「見方・考え方」

平成 29 年 3 月告示の中学校学習指導要領社会科の歴史的分野では、「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。」という目標が示された。

「社会的事象の歴史的な見方・考え方」については、平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申において「社会的事象を、時期や推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係などで関連付けたりすること」とし、考察、構想する際の「視点や方法（考え方）」として次の四つの視点に整理している。

- ①時期、年代など時系列に関わる視点
- ②展開、変化、継続など諸事象の推移に関わる視点
- ③類似、差異、特色など諸事象の比較に関わる視点
- ④背景、原因、結果、影響など事象相互のつながりに関わる視点

新学習指導要領の目標には、「時期や年代」「推移」「比較」「相互の関連」「現在とのつながり」という「見方・考え方」が示されている。

これらの「見方・考え方」を働かせることが歴史的分野の学習の特質であり、時代の転換の様子や各時代の特色を考察したり、歴史に見られる諸課題について複数の立場や意見を踏まえて選択・判断したりするということである。また、これらの「見方・考え方」に着目させ、課題を追究したり解決したりする活動が展開されるように学習を設計することが求められている。

(2) 歴史的な「見方・考え方」を活用した授業－モンゴルの襲来と日本－

ここでは、「展開、変化、継続など諸事象の推移に関わる視点（推移）」「背景、原因、結果、影響など事象相互のつながりに関わる視点（相互の関連）」を活用し、課題を追究したり解決したりする活動として、「モンゴルの襲来と日本」を取り上げる。

この単元について新学習指導要領では、内容 B の(2)中世の日本の(7)に、「鎌倉幕府の成立、元寇（モンゴル帝国の襲来）などを基に、武士が台頭して主従の結び付きや武力を背景とした武家政権が成立し、その支配が広まったこと、元寇がユーラシアの変化の中で起こったことを理解すること。」と示された。「内容の取扱い」では「『ユーラシアの変化』については、モンゴル帝国の拡大によるユーラシアの結び付きについて気付かせること。」とされ、モンゴル帝国の襲来の背景としてのユーラシアの変化を扱うことが明示された。この学習に際しては、「東アジアにおける交流」などに着目して課題（問い）を設定し、モンゴル帝国の拡大の様子を背景に考察できるようにすることなどが考えられる。

また、モンゴル帝国の襲来が日本国内に及ぼした影響などに気付かせるとともに、モンゴル帝国の襲来の背景について、「モンゴル帝国の拡大によるユーラシアの結び付き」などの地理的な確認を基に、モンゴル帝国がアジアからヨーロッパにまたがる広大な領域を支配し、東西の貿易や文化の交流が陸路や海路を通して行われたことなどにも気付くことができるようにする。

第3章 中世の日本 2節 東アジア世界との関わりと社会の変動

1 モンゴルの襲来と日本

教科書：p.76～77

学習内容（配当時間）	学習活動	指導上の留意点
課題把握 1 導入資料の読み取り （動機付け） （5分）	<ul style="list-style-type: none"> 導入資料を見て、モンゴル軍の戦い方の特徴を考える。 ◆集団戦法、軽装、てつはうなど 二度のモンゴル帝国の襲来について概略を説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 服装や武器、戦法の違いに着目させる。 小学校での学習内容を中心に説明する。
モンゴルの襲来はどのようなもので、日本にどのような影響をあたえたのでしょうか。		
課題把握 2 学習課題の設定 （10分）	<ul style="list-style-type: none"> モンゴル帝国の襲来について、その背景・原因・結果・影響など、グループごとに学習課題を設定する（学習課題例） ア. モンゴル帝国はどのような国だろうか（背景） イ. モンゴル帝国は、どのように拡大していったのだろうか（背景）。 ウ. なぜ、モンゴル帝国は日本に襲来したのだろうか（原因）。 エ. なぜ、モンゴル帝国の襲来は成功しなかったのだろうか（結果）。 オ. モンゴル帝国の襲来は、日本にどのような影響をあたえたのだろうか（影響）。 カ. なぜ、鎌倉幕府は滅亡したのだろうか（影響）。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師が設定した学習課題を、グループごとに選択させてもよい。
課題追究 1 学習課題の追究 （15分）	<ul style="list-style-type: none"> グループごとに学習課題を追究する。 （まとめる内容例） ア. チンギス・ハン、遠征経路など イ. モンゴル帝国の最大領域、ヨーロッパとの交流、陸路・海路の整備など ウ. フビライ・ハン、元の成立など エ. 竹崎季長、暴風雨、アジア諸国の抵抗など オ. 御家人の窮乏、分割相続、徳政令など カ. 御家人の不満、悪党、後醍醐天皇など 	<ul style="list-style-type: none"> 教師も参考資料を事前に用意しておく。 教科書 p.77 の「歴史にアクセス」の内容をまとめ、資料 5 を活用させる。 資料 3 を活用させる。 資料 2・6 を活用させる。 資料 7 を活用させる。
課題追究 2 追究結果の発表 （15分）	<ul style="list-style-type: none"> 学習課題を追究した結果を、グループごとに発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 追究した結果をワークシートに記入させ、「学習課題の結論」の部分を中心に発表させる。 時間があれば、発表内容について質疑応答や意見交換を行う。
課題解決・新たな課題 学習課題の発展 （5分）	<ul style="list-style-type: none"> 追究の結果や発表の内容を基に、「モンゴル帝国の襲来の背景・原因と結果・影響」についてワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 新たに生まれた疑問や興味などをワークシートに記入させる。

単元のまとめでの「見方・考え方」を活用した実践事例

(1) 歴史的な「見方・考え方」と「時代を大観し、表現する活動」

平成29年3月告示の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」(いわゆるアクティブ・ラーニング)を実現するための方策として「社会的な見方・考え方」を働かせて、課題を追究したり解決したりする活動の充実が求められている。

中学校社会科歴史的分野では「歴史的な見方・考え方」として、「社会的事象を、時期や推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係で関連付けたりすること」とし、「時期、年代など時系列に関わる視点」「展開、変化、継続など諸事象の推移に関わる視点」「類似、差異、特色など諸事象の比較に関わる視点」「背景、原因、結果、影響など事象相互のつながりに関わる視点」などの「視点や方法(考え方)」に整理された(「中央教育審議会答申別添3-5」)。

従来の「時代を大観し、表現する活動」は、「(時代を)大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現すること」とされ、我が国の歴史の大きな流れを各時代の特色を踏まえて理解するという、歴史的分野の学習の基本的なねらいを踏まえ、各中項目のまとめとして位置付けられている活動である。具体的には「各時代の特色を大きく捉え、政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色など他の時代との共通点や相違点に着目して、学習した内容を比較したり関連付けたりするなどして、その結果を言葉や図などで表したり、互いに意見交換したりする活動」とされている(「中学校学習指導要領解説 社会編」)。

また、この活動によって、『思考力、判断力、表現力等』を養うとともに、各時代の特色を自分の言葉で表現できるような『確かな理解と定着を図る』ことが求められている。

(2) 「この時代の特色をとらえよう」(章のまとめの活動)

28年度版の教科書では、各章の最後に、まとめの言語活動として「この時代の特色をとらえよう」が設定されている。この活動は、時代を大観し、その時代の特色を表現するために、特定の言語活動を行うものである。「ウェビング図」「比較表」「ディスカッション」「歴史新聞」「年表」「プレゼンテーションソフト」などの方法を活用し、時代の特色について生徒が自分の言葉で表現できるようにしたものである。

第3章「中世の日本」では、「比較表」を活用して中世の特色を捉えさせる活動を設定している。「政治の動き」「社会の様子」「外国との関係」「文化の特色」などの項目ごとに古代と比較する表を作成する活動を通して、中世の特色をまとめる活動である。

ここでは、「類似、差異、特色など諸事象の比較に関わる視点」(「比較」の「見方・考え方」)に着目して、古代と中世の「比較表」を作成するという活動を行う。さらに、作成した比較表を基に、グループなどで意見交換をし、他者の考えや意見も取り入れながら、最終的に自分の言葉で中世の特色をまとめる活動を設定することとした。

第3章 中世の日本

教科書：p.63～96

学習内容（配当時間）	学習活動	指導上の留意点
古代と中世との違い 1 (20分)	・「政治の動き」「社会の様子」「外国との関係」「文化の特色」という四つの項目について、古代と中世の特徴をワークシートに記入する。	・古代については、飛鳥時代から平安時代までにしぼって考えさせる。 ・まとめる内容は、一つの項目について二つ～三つ程度とする。
古代と中世との違い 2 (20分)	・四つの項目以外にもう一つ、自分で項目を設定し、古代と中世の特徴をワークシートに記入する。 (例) 活躍した人物、重要な法律など	・古代と中世の違いがはっきりするような項目を、教師が提示してもよい。
中世の特色 1 (10分)	・作成した「比較表」を基に、古代と中世の違い(中世の特色)をワークシートに記入する。	・五つの項目の中から、古代との違いが最も大きな項目を取り上げてまとめさせてもよい。
グループ・学級全体での意見交換 (40分)	・「比較表」や「まとめ」を基に、自分の意見をグループ内で発表し、意見交換を行う。 ・次に、学級全体で意見交換を行う。 (発表の手順) ・まず歴史的事実を述べ、その後に自分の考えを説明する。 ↓ ・次に、それぞれの時代ごとに、その特徴を分かりやすく説明する。	・他者の意見で、参考となるものはメモを取らせる(ワークシート)。
中世の特色 2 (10分)	・他者の意見や助言も参考にしながら、古代と中世の違い(中世の特色)をワークシートに記入する。	・他者の意見で、分かりやすい内容は積極的に取り入れるよう指導する。 ・できるだけ多くの項目から考察し、自分の言葉で二つの時代を比較させる。

1 単位時間でのワークシート

() 組 () 番 () 班 名前 ()

◆班で設定した学習課題について、調べて分かったことなどを下の表に書きましょう。

学習課題

調べたこと	調べて分かったこと	使った資料

◆まとめ（学習課題の結論）

◆各グループの発表を聞いて、モンゴル帝国の襲来の背景・原因をまとめましょう。

◆各グループの発表を聞いて、モンゴル帝国の襲来の結果・影響をまとめましょう。

◆今後さらに調べてみたいことを書きましょう。

第3章 中世の日本 この時代の特色をとらえよう

()組 ()番 ()班 名前 ()

◆中世と古代で学習した内容を、下の表に書きましょう。その際、一番下の空欄には、自分で比較したい項目を書きましょう。

	古代（飛鳥時代～平安時代）	中世
政治の動き		
社会の様子		
外国との関係		
文化の特色		

古代と中世とのちがい（中世の特色）は何だろう

◆「比較表」でまとめた古代と中世のちがいから、中世の特色をまとめましょう。

◆班での話し合いや全体の発表で、他の人の意見で参考になったことをメモしましょう。

名前	参考になった内容（できるだけ簡潔に書きましょう）

◆班での話し合いや全体の発表から、古代と中世のちがい（中世の特色）をまとめましょう。

1 単位時間での「見方・考え方」を活用した実践事例

(1) 「見方・考え方」の学習の拡充

現行の学習指導要領では「現代社会をとらえる見方や考え方の基礎」として「対立と合意」「効率と公正」を位置付け、それらを理解させた上で、大項目以降の学習で現代社会の様々な事象や課題について、考察させたり、判断させたり、表現させたりする活動が求められていた。いわゆる「習得・活用・探究」のプロセスである。新学習指導要領における改訂では、この「見方・考え方」はさらに拡充され、社会的事象を捉える側面だけではなく、「見方・考え方を働かせ」て、社会的事象を考察し、構想する側面が示されている。つまり、資質・能力の育成という観点から思考力・判断力・表現力のより一層の拡充が求められ、さらに「対立と合意」「効率と公正」以外にも大項目ごとに新たに「見方・考え方」が追加して示されている。公民的分野における「見方・考え方」をまとめると、図1のようになる。

大項目に対応した「見方・考え方」

経済：分業と交換，希少性など
 政治：個人の尊重と法の支配，民主主義など
 国際：協調，持続可能性など

「見方・考え方」の基礎

対立と合意，効率と公正

図1 公民的分野における「見方・考え方」

(2) 「社会的な見方・考え方」を働かせた授業の在り方とは？

授業としては「社会的な見方・考え方」を踏まえた「問い」の形を生徒に示し、課題を追究

したり解決したりする活動がより一層求められてくる。また、生徒が抱く興味・関心を考察や構想に向かわせる「問い」の提示の仕方やその質も問われることとなる。時には扱う教材そのものが生徒たちに新たな「問い」を想起させ、より主体的な学びの場を創ることにもなる。そこで重要になってくるのが、教師が生徒の主体的な思考を促す教材を提供することによって、社会問題のより良い解決に向けて生徒の社会認識がより一層深められ、さらにより良い「問い」が生まれてくるという学習の好循環を生み出すことである。

(3) 貧困問題の解決をめぐる授業実践

本実践は、新学習指導要領の内容D「私たちと国際社会の諸課題」に位置付けられ、南北問題の題材として、貧困の解消に取り組む国連やNGOなどの活動、フェアトレード、マイクロクレジットなどソーシャルビジネスを学習する。生徒は貧困などの課題の解決のために経済的、技術的な協力などが大切であることを理解し、学習した知識を基にグループ活動によって他者の意見を取り入れながら、貧困をなくすための提言という形で表現することで、思考を深めていくというねらいを持って構想した。

第5章 地球社会と私たち 2節 さまざまな国際問題

3 貧困問題—公正な世界を創る（第2時）

教科書：p.186～187

学習内容（配当時間）	学習活動	指導上の留意点
課題把握 1 導入資料を活用した資料の読み取り (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 導入資料「世界の子どもの問題」の写真から、気付いたこと、感じたことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 貧困・紛争・生活環境の悪さに注目することで、先進国（日本）と発展途上国との不均衡な関係性に疑念を抱かせ、学習の動機付けとする。
課題把握 2 学習課題の設定 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 資料の読み取り 資料 5 を見て、読み取れることを発表し、貧困問題の現状と格差の拡大が深刻であることを捉える。 先進国と発展途上国との格差の要因は何か、解消するにはどうしたらよいかという課題を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 貧困と格差の拡大は先進国と発展途上国との関係性に原因があることに気付かせ、課題解決への意欲を高めさせる。
課題追究 1 協働学習 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> 協働学習 発展途上国が貧しい状態から抜け出せない要因を、「貧困の悪循環」をキーワードに、各自が付箋を使ってキーワードを列挙し、グループ化する作業を通して、視覚的に図示する。 思考力・判断力の育成 どのような支援があると発展途上国は貧困の悪循環から抜け出せるのか、その方策を考え、発表する。 	<div data-bbox="843 826 1049 1101" data-label="Diagram"> </div> <ul style="list-style-type: none"> ホワイトボードや模造紙などを使って、貧困の原因を多角的に考察させ、図示させる。 提案された支援策について他の生徒から意見を求め、どのような方策が効果的か、確かめようという関心を持たせる。
課題追究 2 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 知識・技能の確認（教科書） p.187「貧困をなくすための取り組み」「途上国の人々の自立に向けて」を読み、国連の支援策や「持続可能な開発目標（SDGs）」とは何か、フェアトレードやマイクロクレジットがどのような仕組みなのか、そのねらいや具体的な内容を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 国連が、貧困問題の解決に向けて具体的に目標を設定し、その解決を目指している点に着目させ、日本はどのような貢献ができるのかという点に関心を持たせる。 マイクロクレジットは金融機関として利益の最大化が目的ではなく、社会問題の解決を目指している点に特徴があることに着目させる。
課題解決・新たな課題 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 評価・振り返り フェアトレードやマイクロクレジットが貧困問題への解決の取り組みとなっていることを知る。また、自分たちの考えた、あるいは、これまでの支援策とは何が違うのかについて考え、意見を述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 貧困問題の解決につながっているか、という視点から評価し、自分（たち）の考えた支援の在り方を振り返るきっかけとさせる。

単元のまとめでの「見方・考え方」を活用した実践事例

(1) 「見方・考え方」を活用した単元のまとめの考え方

国際単元の学習では、小学校段階において地球規模で発生している課題について調べ、その解決のための連携や協力の様子をまとめて表現してきたという学習経験を踏まえ、中学校ではさらに「多面的・多角的に考察，構想し表現する」というように、物事を横断的・相互的に捉え、課題の解決に向けての自分なりの考えをまとめ、提言していくような活動が期待され、より良い社会の形成者として必要な資質・能力を育てていくことが求められる。「社会的な見方・考え方」は資質・能力の育成全体に関わるもので、小・中の連携を意識しながら、国際単元では「協調，持続可能性など」の「見方・考え方」を働かせることを意識して授業を展開することになる。

(2) 単元の構成～国際単元を例として～

国際単元のまとめでは、政治的な意思決定を行う際に国際社会の問題に広く目を開き、我が国を取り巻く国際社会の一員として、何をどのように考え、行動していくべきかを主体的に考察し、判断する資質・能力を育成することが求められる。つまり、国際社会の問題について、対話的な議論を展開し、人権を尊重し、民主的な意思決定の方法を通して、自らの選択・判断を行い、より良い社会の実現に向けての提言・行動・実践を伴う活動を展開するべきである。生徒の主体的な思考を促す教材の提供によって、社会問題のより良い解決に向けて生徒の社会認識がより一層深められ、「どう生きていくべきか、どのような社会像を描くか」といった、より良い社会の在り方や個人の生き方を構想する力の育成へとつながるものと考えられる。

学習内容（配当時数）	学習活動	指導上の留意点
導入 バター戦争 「なぜ戦争はなくならないのか」 (第1時)	<ul style="list-style-type: none"> ・「バター戦争」(p.168～169)を読み、タヌキ国とキツネ国の争いを理解する。 ◆互いに「最強兵器」の開発を進めた理由や、戦争や紛争が起こる原因について考えを出し合う。 ◆どうすれば戦争や紛争を防げるか、考えたことをグループで意見交換し、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合い活動を中心に授業を進める。 ・架空の事例を通して、世界で起こっている戦争や紛争と解決のための取り組みについて、関心を高めさせる。 ・戦争や紛争の原因や影響、解決策について、既習事項を踏まえるとともに、学習の見直しを持たせる。
1節 国際社会の仕組み	<ul style="list-style-type: none"> ・国家の要件と国際社会のルールについて理解する。 ◆国際社会は主権を持つ国々で成り立ち、それぞれが固有の領土（領海，領空を含む）を持ち、対外的に独立を守る権利（主権）を持っていることを理解する。 ◆国際連合の役割について、総会， 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際問題の解決に際しては、国家同士が尊重し合い、国際協調を築くことが大切であることに気付かせる。 ・国際協調のためには、互いの国旗・国歌を尊重し合い、国際法を遵守することが大切であることに気付かせる。 ・国際社会において、国家や国際機構以外

第5章 地球社会と私たち

教科書：p.167～204

(第2～4時)	<p>安全保障理事会など主要な組織の目的や働きの概要を捉え、抱えている課題について、資料を基に話し合う。</p> <p>◆ EUを中心に、地域主義の動きを理解する。</p>	<p>の組織が活動していることも意識させる。</p> <p>・人や物の流れが活発化し、工業が発展した一方で、地域格差が広がったことなどを捉えさせる。</p>
(第5時)	<p>・ヨーロッパ統合をめぐる様々な課題について学習する。</p> <p>◆ p.174の導入資料を見て、財政危機を招いたギリシャへの支援をめぐる各国の思惑を考察し、EUの拡大による利点と課題について、自分の考えをまとめる。</p>	<p>・財政危機への対応をめぐるEU各国の思惑や対応の違いがあり、「一つのヨーロッパ」の理念が揺らいでいることに気付かせる。</p> <p>・EUの理念に照らして、ギリシャ支援の在り方についての、自分の考えをまとめさせる。</p>
2節 さまざまな国際問題 (第6～10時)	<p>・地球環境問題について、資料やp.179「公民にチャレンジ18」などを活用して理解する。</p> <p>・資源・エネルギー問題について、資料を基にこれからの在り方を考える。</p> <p>・貧困問題について、ODAをはじめとする我が国の国際貢献の様子から、経済的、技術的な協力の重要性を理解する。</p>	<p>・国際協力の重要性の高まりの中で、我が国の貢献が期待されていることに着目させる。</p> <p>・省資源や省エネルギー、リサイクル、新しい資源・エネルギーの開発と利用がより一層必要であることを意識させる。</p> <p>・マイクロクレジット、フェアトレードなどの、貧困の解消への取り組みを紹介する。</p>
3節 これからの地球社会と日本 (第11～16時)	<p>・文化や宗教の多様性について、p.193「公民にチャレンジ20」を活用して話し合う。</p> <p>・日本の外交政策や近隣諸国との関係に、どのような課題があるか理解する。</p> <p>・世界平和の維持のために私たちに何ができるかについて、「アニマル大陸の危機を救おう」(p.202～203)を活用して、課題の解決のために重要なことについて話し合う。</p>	<p>・異文化や宗教の理解の重要性と困難さに気付かせる。</p> <p>・領土をめぐる問題の現状については、地理的分野における「領域の範囲や変化とその特色」、歴史的分野における「領土の確定」の学習の成果も踏まえて、理解させる。</p> <p>・架空の国際社会が抱える問題を例として、国家間の様々な思惑の対立と、解決の方法について考えさせる。</p>
まとめ 「難民問題について考えよう」 (第17時)	<p>・p.188の導入資料、p.189資料6などを見て、難民問題についての学習を振り返る。</p> <p>・日本の難民受け入れの是非も含め、解決の方策について、自分自身の課題として関心を持つ。</p>	<p>・難民問題をきっかけとして、異なる意見や立場を理解する態度、課題を解決するために努力しようとする意識、より良い社会を築いていこうという意欲を養わせる。</p>

第5章 地球社会と私たち 2節 さまざまな国際問題
3 貧困問題—公正な世界を創る

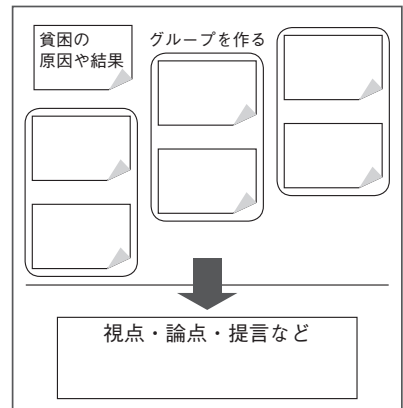
教科書：p.186～187

(1) 資料「世界の子どもの問題」を見て、気づいたこと、感じたことを挙げよう。

(2) 子どもの貧困の実態から読み取れることを書き出そう。

(3) 「貧困の悪循環」について考えよう。

- ①付せんに、貧困の原因や結果として考えられることを書き出そう。
- ②ホワイトボードを使って、付せんに書かれている内容を分類してグループを作ろう。
- ③分類したグループごとに名前を付けよう。
- ④グループの内容を使って、班ごとに貧困問題を考えるための視点や論点、提言をまとめて、発表しよう。



あなたの支援策を書こう	他の班の支援策を書こう

(4) フェアトレードやマイクロクレジットは、自分たちの考えた、あるいは、これまでの支援策とは何がちがうか、あなたの考えを書こう。

第5章 地球社会と私たち まとめ

難民とは？

迫害をおそれて国外ににげてきた人々のことです。

1951年に採択された「難民条約」（日本は1981年に加入）では、人種、宗教、国籍、政治的意見や特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいと迫害を受けるか迫害を受けるおそれがあるために他国へのがれた人々とされています。紛争や人権の侵害によって国外にのがれた人々も難民となります。

国外に避難した人々が全て難民として認められるわけではありません。受け入れるかどうかを決定するのは、受け入れ国の政府の権限です。

(1) 難民の受け入れについて、あなたの考えを書こう。

難民を受け入れるべき	難民の受け入れをやめるべき
<p>そう考えた理由は、</p>	<p>そう考えた理由は、</p>

(2) 難民の受け入れについて、グループでの話し合いの結果をまとめよう。

(3) 難民を受け入れるに当たって、どのようなことが課題となっているか、また、それを解決するために必要なことについて、あなたの考えをまとめよう。

新学習指導要領における「見方・考え方」一覧

分野	新学習指導要領の項目（大項目・中項目）		対応する「見方・考え方」
地理	目標		位置や分布・場所・人間と自然環境との相互依存関係・空間的相互依存作用・地域
	A 世界と日本の地域構成	(1) 地域構成 ①世界の地域構成 ②日本の地域構成	位置や分布 大陸と海洋の分布・主な国の位置・緯度や経度 周辺の海洋の広がり・国土を構成する島々の位置
		B 世界の様々な地域	(1) 世界各地の人々の生活と環境
	(2) 世界の諸地域		空間的相互依存作用・地域・州という地域の広がり・地域内の結び付き
	C 日本の様々な地域	(1) 地域調査の手法	場所・対象となる場所の特徴
		(2) 日本の地域的特色と地域区分	分布・地域・地域の共通点や差異・地域区分
		(3) 日本の諸地域	空間的相互依存作用・地域・地域の広がり・地域内の結び付き・人々の対応
		(4) 地域の在り方	空間的相互依存作用・地域・地域の結び付き・地域の変容・持続可能性
歴史	目標		時期や年代・推移・比較・相互の関連・現在とのつながり
	A 歴史との対話	(1) 私たちと歴史	時期や年代・推移・現在の私たちとのつながり
		(2) 身近な地域の歴史	比較や関連・時代的な背景や地域的な環境・歴史と私たちとのつながり
	B 近世までの日本とアジア	(1) 古代までの日本	古代文明や宗教が起こった場所や環境・農耕の広まりや生産技術の発展・東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化
		(2) 中世の日本	武士の政治への進出と展開・東アジアにおける交流・農業や高工業の発達
		(3) 近世の日本	交易の広がりとその影響・統一政権の諸政策の目的・産業の発達と文化の担い手の変化・社会の変化と幕府の政策の変化
	C 近現代の日本と世界	(1) 近代の日本と世界	工業化の進展と政治や社会の変化・明治政府の諸改革の目的・議会政治や外交の展開・近代化をもたらした文化への影響・経済の変化の政治への影響・戦争に向かう時期の社会や生活の変化・世界の動きと我が国との関連
		(2) 現代の日本と世界	諸改革の展開と国際社会の変化・政治の展開と国民生活の変化
公民	A 私たちと現代社会	(1) 私たちが生きる現代社会と文化の特色	位置や空間的な広がり・推移や変化
		(2) 現代社会を捉える枠組み	対立と合意・効率と公正
	B 私たちと経済	(1) 市場の働きと経済	対立と合意・公立と公正・分業と交換・希少性
		(2) 国民の生活と政府の役割	
	C 私たちと政治	(1) 人間の尊重と日本国憲法の基本原則	対立と合意・効率と公正・個人の尊重と法の支配・民主主義
		(2) 民主政治と政治参加	
D 私たちと国際社会の諸課題	(1) 世界平和と人類の福祉の増大	対立と合意・効率と公正・協調・持続可能性	
	(2) よりよい社会を目指して	(社会的な見方・考え方)	